

第二章 幻想の日常

トン、トン、トン、トン、トン……。

リズムのいい包丁の音が、朝のキッチンにこだましている。

流し台の前。わりとなれた手つきで包丁をあやつり、水で戻した干し椎茸^{しいたけ}を刻^{きざ}んでいるのは、制服姿のかりんである。

まな板の傍^{わき}にあるボールには、ゴボウやニンジンの微塵^{みじん}切り、水煮^{みず}して切りわけてある鶏^{とり}のささみなどが入っている。

どうやら、炊^たき込み御飯^こをつくるための下ごしらえをしているところらしい。かりんの後ろ^{うし}にあるテーブルの上には、大小ふたつの弁当箱が、ふたを取ってならべて置いてある。

中^{なか}にはすでに、唐揚げや卵焼きなどのおかず類^{からあ}が詰め^つめられている。

かりんはフライパンを火にかけ、その中にあらかじめ刻^{きざ}んでおいた材料をあけ、炒^{いた}めはじめた。

あとは、醤油^{しょうゆ}やみりんなどの調味料でできとくに味つけし、お米といっしょに炊飯器^たで炊^たきあげれば、できあがりである。

誰^{だれ}もないリビングでは、テレビがつけっぱなしになっていて、やけに明るいトーンのアナウンサーが朝のニュースを伝えていた。

画面左上の隅^{すみ}にでている、この時間帯特有のデジタル時計は、いまちょうど、七時二十分になったところだ。

それから程^{ほど}なくしてキッチンに通じる扉がひらき、かりんが部屋に入ってきた。リビングの床^{ゆか}はフローリングになっていて、カーペットなどはとくに敷^しかれてはいない。が、かわりに、真贋^{しんがん}のほどこそ定^{さだ}かではないものの、虎^{とら}の毛皮^けが一枚、この部屋の主^{ぬし}よろしく板敷きの床のほぼ中央で、その存在を誇^こ示^じしていた。

かりんが床^{ゆか}の上に転^{ころ}がっていたリモコンを拾い上げ、ミュートのボタンを押してテレビの音を消したのとほぼ同時に、毛皮の頭のあたりに置かれていた電話機が鳴りはじめた。

敷^{しきがわ}皮の上にひざをつき、かりんはきっかりツーコールめで受話器を取った。

「おはよう、おかあさん。……うん、元気だよ……」

かりんは現在、瀟洒^{しょうしゃ}なマンションの最上階にある三LDKの一室に、たったひとりで住んでいる。

といつても、かりんがお金持ちのお嬢様で、わがままのためにひとり暮らしを楽^{たの}しんでいるというわけでは、もちろんない。

つい四ヶ月ほど前までは、母と兄、そして、かりん自身をふくめ、親子三人がここで仲良く暮^くらしていたのだ。

「——えっ？ ……だいじょうぶだってば！ ……もうっ、心配症なんだから、おかあさんは！

……なあに？ きょうの朝ごはん？

えーとねえ、たまご焼きと、のり、それから、おとうふのお味噌汁でしょ、あと……。

あーっ、なんなのよそのため息はあ！

……そんなことない、ちゃんとまともなおかずだってつくっています！

いいわよ。そこまで言うんなら、きょうのお弁当、なにつくったか教えてあげるわよ！」

かりんのもつとも古い記憶を掘^ほり起こしてみれば、そこに、父親の存在^すさえ見つけたことができたかもしれない。

しかし、それは現在^{いま}のかりんにとって、なんの意味も為^なさない記憶の残滓^{ざんし}にすぎなかった。

「——まず、炊き込みごはんでしょ、あと、から揚げに、煮物。それから……。えっ、……うーっ、その疑^{うたが}わしそうな声はなによお、わたしだって、煮物くらいつくれるわよ！

……えへへへ、そっ、実^{じつ}をいうと、このまえ、浩^{こう}ちゃんのおばさんに教^{おそ}わったの。

……うん、わかってる。うん。でね、きょうが初挑戦だったんだけど、うまくいったみたい。と言っても、だしはインスタントだけだね。へへ……」

かりんがまだ幼いころ『ちよつと旅行にでも行ってくる』そう言い残して出^でていったとき、父は二度と戻らなかった。自殺ではないか、とも噂^{うわさ}されたが、遺言めいたものはとくに見つからなかったので、失踪^{しっそう}扱いのまま今日^{こんにち}に至^{いた}っている。

そんなかりんにとって、兄、史郎しろうの存在は大きかった。ほぼ十二歳ひとまわり、年齢としが離れているせいもあり、かりんにとっては父親がわりともいえる、頼もしい兄であった。だが――。

「――うん。昼間、学校に行けばみんなに会えるし、夜は浩ちゃんたちと一緒にだから……さみしくなんかない。さみしくなんか、ない、けど……」

かりんの兄、史郎が急逝きゅうししてしまったのは、ついこのあいだの夏のできごとだった。その精神的ショックから、母はなかなか立ち直れず、いつしか睡眠薬とアルコールに依存するようになり、ある日、とうとう倒れてしまったのだ。

やむをえず、かりんひとりを東京に残し、長野にある実家で静養することとなつてしまった母ではあったが、孤独な生活を強いられているかりんを気遣い、朝夕二回の定時連絡は欠かしたことがなかった。

そして季節ときはすぎてゆき、かりんのたったひとりっきりの生活も、すでに、ひと月になるうとしていた。

「でも、おかあさん、はやくよくなつて帰ってきて。」

……うん、そうじゃないの。本音ほんねを言っちゃうと、朝はやく起きてお弁当とか自分でつくったりするのって、けっこうたいへんだもん。

そつ、はやく楽らくしたいの。すこしでもわが子を想う気持ちがあるんなら、一秒でもはやくよくなつて帰ってきてよね。じゃないと非行に走って家出しちゃうかも……。なんて、じょうだんだけど。

うん、わかった。……うん。あまり時間ないし、また、夜、ね……。バイバイ……」

通話がとぎれても、なおしばらくの間あいだ、かりんは耳に受話器を押しあてたまま、音の出ないテレビをながめつづけていた。

「さみしくなんか、ない。さみしくなんかないよ、おかあさん。でも……」

乳白色のドームを通して降りそそぐ、やわらかな光の中に、かりんはひとり佇んでいた。

あたたかな朝の陽光が、マンション最上階のエレベーターホールに満ちあふれ、おだやかな時のながれをつくりだしている。

「浩ちゃん、きょうは遅いな……」

そうつぶやきながら、かりんは胸に抱いたお弁当の包みに目をやり、ちいさなため息をついた。

瑠璃色のバンダナに包まれたお弁当は、つい先ほどできあがったばかりで、まだほんのりと温かい。

かりんは、腕時計を一瞥して時刻の確認をしたあと、なにげなく、頭の上のベレーに手をやった。べつだん帽子がずれていると感じたわけではない、たんなる癖である。

が。

「あっ!？」

あるはずのもの、つまり学校指定のウルトラマリンのベレー帽がなかったのだ。出しなに、鏡を見て入念にチェックしていたにもかかわらず、かぶるのを忘れてきたというわけだった。もっとも、かなりそっかしい面のあるかりんにとって、それほどめずらしくもない失敗のひとつだったのだが。

「なにか忘れていたような気がし……痛っ、もうっ!」

足もとに置いてあった学生鞆に蹴つまずくという失態をかさねつつも、かりんは急ぎ、自分の部屋へと取って返した。

「これでよしっ、と……」

かりんは、自室にあるチェストの上の鏡をのぞき込み、うなずいた。頭の上には、鮮やかなブルーのベレーがちょこんとのっている。

黒に近い紺、もっとも濃い藍色を褐色というが、今、かりんが身にまとっているのは、その褐色を基調としたチェックのプリーツスカートに、白衿のセーラーブラウスを組み合わせ、ブルーブラックのボレロを重ね着するという、清楚でかわいいたデザインの制服である。

「いけない、いそがなきや……」

かりんがお弁当の包みを胸に、小走りでエレベーターホールに戻つてみると、すでにそこには彼女の待ち人が姿をあらわしていた。

「あ、浩ちゃん、おはよう!」

かりんにそう呼びかけられ、ふりむいたのは、やや短めに刈りそろえた髪がよく似合う、端正な顔立ちの少年で、かりんの幼なじみ、紺野浩一だった。

浩一は、かりんとは同じ年^{おなじどし}で、おなじ高校に通う同級生でもある。

浩一が身につけているのは、もちろん戸越高校男子の制服で、アルミニウム製の銀ボタンがポイントの詰め襟^{えり}の学生服だ。

とびっきりの笑顔を浮かべ、自慢のお弁当を手わたそうと浩一に近づいていったかりんだったが――。

「……ちよつ、ちよつと！ なにやってんのよ!!」

よく見ると、浩一は自分の学生鞆を足もとに置き、かわりに、かりんがそこに置きっぱなしにしていた鞆をかってに開^{ひら}いて、なかをのぞき込んでいる。

「なんだ、そこにいたのか。かばんだけ残してどこに行ったのかと思ってさ、ちよつと探^{さが}してたと……」

「わたしが、そのなかに隠^{かく}れていられるほど小さいとも思ってるの！」

「ま、朝からそうとんがるなって。ひとに見られて困^{こま}るようなものは、とくに入^{はい}ってないだろ？」

かりんは頬^{ほお}を染めて、浩一から乱暴に鞆^{うば}を奪^{うば}いかえした。

「入^{はい}ってるわよ！」

だが、かなり大きな声でそう言いながらも、今まで大^{だい}事に抱^{かか}えていた瑠璃^{るり}色の包^{つつ}みを浩一に向^むかってさしだした。

「おつ、わりいな、いつも……」

「いいの、わたしのほうこそ浩ちゃん家^ちで、まいばん夕^ゆごはんお世話^{せわ}になってるんだもん、これくらいのこと……」

かりんはそこで、ふいに口^{くち}をつぐみ、あらためて浩一の顔を見やった。

なにか気になることでもあるのか、浩一は、お弁当の包^かみを手にした、そのま^まの格好^{かっこう}で、ぎゅっと眉根^{まゆね}を寄せ、首^{かし}を傾^かげている。

「浩ちゃん？」

どうしたの？ という顔でかりんが訊^きく。

問^といかけられた浩一は、おもむろに口^{くち}をひらいた。

「もしかして……」

「もしかして？」

浩一の視線が、ゆっくりとかりんに向^むかって動いてゆき、その瞳^{ひとみ}の上でピタッと静止した。

「きょうは、午後の授業……カットじゃなかったっけ？」

「え？ あーっ、わすれてた！ どうしよう!？」

「どうしようって、なにが？ 休講になるぶんには、別に困ることなんてないだろ」

「ばかね、そのことよ!」

かりんは、浩一の手につけているお弁当の包みを指さしながら、そう言った。

「これ？」

と、まるで理由がわからないといった表情で浩一が訊きかえす。

「あーあ、わざわざつくってそんしたなあ」

「そんなこと言ったって、つくっちゃまったもんはしょうがねえだろ。こいつは、ありがたーく頂かせてもらうから、安心しろって」

「かえして!」

なにを思ったのか、かりんは突然そう言い、浩一に向かって手を突きだした。

「な、なんだよ、いまさら……」

浩一が、かりんの手からお弁当をかばうようにして後ずさる。

かりんはそんな浩一に対し、まるで聞き分けのない幼子を諭すかのような口調で、言った。

「ばかね、うちに置いてくるだけよ。学校に持っていくても重たいだけでしょ？ 心配しなくても、帰ってからちゃんと食べさせてあげるから」

「ふん、ばかはどっちだよ！ 弁当を家で食ってうまいわけねえだろ。きょうは天気もいいし、屋上かどつかでのーんびりと、空でも見ながら食って帰るからいい、ほっといてくれ!」

「……………」

かりんは数秒ほど考え込んでから、足もとにある自分の鞆に、ちらっと視線を投げかけた。中にはもちろん、かりんのぶんのお弁当が入っている。

「浩ちゃんがそうしたいって言うんなら、べつにいいけど……」

すでに浩一は、自分の鞆にお弁当の包みを押し込んでいる。

かりんは小さく肩をすくめ、話題を変えた。

「……ねえ、ちいちゃんは？」

「ああ千鶴なら……」

浩一は、エレベーターの下降ボタンを押そうと、かりんの後ろにまわり込んで言葉を継いだ。

「トイレだよ、トイレ。しかも大！ 千鶴のトイレの長さはハンパじゃないから。待つてると遅くなるぜ！」

「浩ちゃん！」

かりんの澄んだソプラノが、浩一の背中に突き刺さった。いきなり、真後ろから怒鳴られた浩一は、ビクツとしてふり返った。

「な、なんだよ急に……」

「浩ちゃんって、ほんつとうに、デリカシーがないのね！」

「デリカシー!? なんのことだ？」

浩一のこの返答に、かりんは「呆れた」といった表情をありありと浮かべ、言った。

「そんな調子だから、女の子にもてないのよ。顔のつくり自体はそれほど悪くないんだから、もうちょっと相手のことを思いやってあげられるような、やさしさ……みたいなのを持ってみたら？」

むつとした顔で、浩一も負けじと言い返す。

「けっ、その言葉、そっくりそのまま熨斗つけて返すぜ！ てめえこそ、もっと女らしくしたらどうなんだよ！」

「よけいなおせわ！ 最近は、ちゃんとお淑やかにしてるもん」

「へっ、お淑やかあ？ なんだよそれは」

「なによお……」

「たしかに、かりんはかわいいし、スタイルもいい。それは認めよう。もし戸越高校でミスコンでもひらいたら、クイーンに選ばれたとしてもおかしくないくらいだ」

「な、なによ、いきなり……」

浩一が唐突に自分のことを誉めだしたので、かりんは戸惑い赤くなった。

「しかあし、それはただ黙って突っ立ってる時の話だ！」

「それ……どういう意味？」

かりんの目がすうつと細められ、すじの通った形のいい眉が、片方ぴくつとはね上がった。が、浩一はそれに気づきもせず、先をつづけてしまう。

「つまりだな、戸越高校の奴らのほとんどは、かりんの真の性格というか、恐るべき過去を知らないから……」

「がっ！」

ローファアーのつま先はかなり硬い。

かりんの蹴りを向脛にうけ、浩一は脚を抱えて跳びまわった。

「ほらみる、すぐこれだ！」

「ふんっ、だ！」

くちびるをとがらせて、ぷいっとそっぽを向くかりん。

しかし、浩一も負けてはいない。かりんの視線の先へとすばやくまわり込み、左眉のあたりを指しながら、まくしたてた。

「いいか、こいつは小二のとき、おまえに塀の上から、いきなり突き落とされてできた傷だ。忘れたとは言わせないぜ！ それからこれは小五の夏休みに……」

浩一は頭や肘、果ては膝にいたるまで、わざわざ学らんの袖や裾をまくり上げ、いわく付きの古傷——なるものを見せつけていく。

しばらくは目をとじ、浩一の言葉など、無視しようと努力していたかりんだっ
たが、ついに我慢できなくなり、叫びだした。

「そんな昔のこと、今頃になって言いだすなんて卑怯よ！」

「けっ、なんとも言いやがれ！」

「男のくせに、過去のこいつまでも根に持って、ぐじぐじぐじぐじ、もうサイ
テー！」

「な、なんだとお！」

「なによ、やるきい？」

ふたりとも、学校に行くことなど完璧に忘れていた。
が、そのとき。

「あら、ふたりとも、何をなさっていらっしやいますの？」

はっとしてふりむいたかりんの目の前に、浩一の姉、紺野千鶴が立っていた。

「あっ、ちいちゃん、おはよう！」

かりんは、千鶴の存在に気づくやいなや、ぱっと表情を変え、にこっと微笑ん
でそう言った。

「おはよう、かりんさん」

にこつと微笑^{ほほえ}みかえしながら、そう答えた千鶴の髪は、ちよつと短めのショートボブ。そしてその上に、ちよこんとブルーのベレーをのせている。

着^きている制服のデザインは、かりんとまったくおなじ戸越高校の制服だ。が、胸のリボンの色だけが異^{こと}なっている。

千鶴のリボンは、シックな色調のチューリップブラック。しかし、かりんのそれは元気いっぱいの翠である。

どうやらリボンの色をわざと違えることで、簡単に学年を識別できるようになっているらしい。

千鶴は、ふたりの前を通りすぎ、エレベーターのボタンに触^ふれてから、くるつとふりむいた。

ふたりにくらべると、千鶴は若干^{せう}背が低く、一五三センチしかない。浩一とは二四センチ、かりんと比較しても一〇センチほど差があることになる。

小柄^{こがら}で童顔^{どうがん}な千鶴は、ほとんど、実年齢^{じつねんれい}どおりに人から見られたためしがない。それでも、制服を着^きているうちはまだいいと言える。少なくとも高校生であるということとは理解してもらえるからだ。

問題なのは私服のとき——それも、浩一といっしょにいるときである。初対面の人に浩一とならんで挨拶^{あいさつ}すると、まず、姉としては見てもらえない。なぜか、かわいい妹になってしまうのだ。

そのうえやつかいなのが、浩一が千鶴のことを呼ぶとき『千鶴』と呼^よび捨てにすることだ。けっして『お姉さん』などとは呼んでくれない。そのため、どうしてもお互^{たが}いを名前で呼び合うこととなり、結果として“仲のいい恋人同士”と、勘違いされてしまうこともしばしばだった。

その千鶴が、ふたりをやや見上げるような感じで、かりんと浩一の顔を交互^{こうご}に見やり、につこり微笑^{ほほえ}んで言った。

「ほら、ふたりとも、急がないと遅刻しますわよ！」

「けっ、なに気どつてやがんだよ！ ふつうにしゃべれよ、ふつうに！ それに、もし遅刻したら千鶴のせいだからなっ！」

「ま！ どうしてですか？」

「千鶴のトイレが、なが……」

バンッ！

浩一が台詞^{せりふ}を最後まで言い終えないうちに、千鶴の学生鞆^{かばん}がその頭に振り下ろされた。

「痛^{いた}つてえなあ、なにすんだよ！」

頭をさすりながら浩一が口^{くち}をとがらせる。

かりんは、そんな浩一を『ほら御覧なさい！』とでも言いたそうな表情で見やっ
つてい、千鶴は自分の鞆を見つめ、その表面を手でさすりながら、

「まあ、痛^{いた}かったでしょう？ ごめんなさいましね……」

と、囁^{ささや}きかけている。むろん、浩一への当てつけであることは言うまでもない。
「こ、このあま……」

浩一は、怒りをぶつける相手を急遽^{きんげん}、かりんから千鶴へと変^かえた。

しかし、千鶴はいつこうにあわてる様子もなく、浩一の鼻先に剣道着が入っ
ている黒い巾着^{きんちゃく}を押しつけ、言った。

「はい！ これは、わたくしからあなたへのささやかなプレゼントですわ。どう
ぞ、お受けとりになってくださる？」

浩一は剣道部……否^{いな}、日本武道部に所属している。

浩一たちの通う戸越高校は生徒数が少なく、部活は基本的にかなり厳しい状況
下に置かれている。人数の少ないクラブは、そく廃部にされてしまうからだ。そ
のためか、各部の人員獲得作戦は熾^{しれつ}烈^{れつ}を極^{きわ}め、活動日が、基本的に週三日までと
限定されていることもあって、二重、三重の在籍者もかなりの人数にのぼる。

そんななか、つい昨年、廃部に追い込まれた空手部の二の舞になるのをさける
ため、おなじ人員難に悩む、剣道部と弓道部が手を結び、今年になって新^{あら}たにで
きたのが、日本武道部、というわけだった。

浩一が日本武道部に入ったきっかけは、入部希望だった空手部が入学前に消滅
してしまい、特にやってみたい部活がなかったところに、旧弓道部員だった千鶴
の勧誘を受けたためである。

もちろん、かりんも千鶴の強烈な勧誘というか、ほとんど強制的に、日本武道
部の弓道部門に入れられてしまった。

はじめは、かりんとおなじように弓道部門に所属していた浩一だったが、先^{さき}に
入部していた千鶴より腕が劣るのが気に入らなかったらしく、すぐに剣道部門に
移ってしまった。

「きょうは部活ないぜ……」

浩一は、巾着を手で払いのけるようにして受け取り、むっとした口調で言った。千鶴は、もちろんそんなことはわかっています、というような顔つきで言いかけた。

「あなたの汗くさあい道着を洗あらわされるのは、もう金輪際こんりんざいごめんですの！ だって浩一はわたくしが注意しなければ、何週間でもおなじものを着きつつけるでしょう？ せめて、週に一度は新しいものと変えてくださらない？」

「だから、きょうは……」

「あしたは祝日で学校はお休みな。おねがいだから、忘れないうちにお持ちもになつてくださる？」

言葉ことばづかいこそ丁寧ていねいだが、千鶴の目には有無うむをいわせぬ迫力があつた。

「ちっ、よけいな世話せわやきやがって……」

と、口くちでは文句を言いながらも、浩一は鞆の握りに巾着をひっかけた。

ちょうどそのとき、タイミングよくエレベーターが到着して、銀色のドアがすうつと、すべるようにひらいた。

「しかし、よく似てるよな、おまえらふたり……」

浩一が、かりんと千鶴の後あとを追って、エレベーターに乗り込みながら言う。

浩一に、よく似ていると言われた当のふたりは、何度かまばたきをするあいだ、お互たがいに顔を見合わせた。

「まあ、ほんとうに？ 千鶴お姉さまのようなすてきな方かたに似ているだなんて、わたくし、とても光栄ですわ！」

かりんは、千鶴の口調をまねて、なんの臆面おくめんもなく言つてのけた。

頬ほおに手をあて、千鶴が言葉を返す。

「ま、かりんちゃんてば……」

浩一は、呆あきれ顔でため息をついた。

「ばあか！ 性格だよ、せいかく！ まるつきり、ふたこの姉妹しまいってかんじだぜ？」

かりんは、浩一が言外げんがいにふくませた皮肉をさらつと無視して、言った。

「そうね、もしかしたら、わたしとちいちゃんって、前世ぜんせでは姉妹きょうだいだったのかも

……」

「いいえ、前世^{ぜんせ}だけじゃなく今世^{こんせ}でも、私たち、きつとまた姉妹になれますわ」
「え？」

エレベーターが一階につき、ドアが開いた。

「そ、そんなこと……」

かりんは、一瞬で千鶴の言葉の意味するところを理解したようだ。さつと顔を赤らめ、うつむいてしまった。

千鶴は、そんなかりんにかまわず、澄^すました顔でエレベーターを降り、ひとあし先に玄関へと向かった。その後を、やや遅れてかりん、そして浩一がつづく。自分のすぐ横を歩いている浩一を、かりんはちらつとぬすみ見た。が、浩一は、なにも気づかなかったのか、それとも、わかっていながらあえて無視しているのか、その表情からは、なんとも判断がつかなかった。

かりんたち三人は外^{そと}にでた。空は快晴で雲ひとつなく、空気は冷たく澄^すみきつている。

ふいに、いつもの口調にもどって、千鶴がたずねてきた。

「ねえ、かりんちゃん。さっきのつづきだけど……あたしと姉妹になるの、いや？」

「いやっていうわけじゃないけど……」

かりんは、どう答えていいかわからず、あいまいに言葉をにこした。

千鶴がくすつと小さな笑^えみをもらす。

「——ですって、よかったじゃない浩一！」

かりんを挟^{はさ}んで向こうがわを歩いている浩一に、千鶴は突然はなしを振った。

「ん？ 何^{なに}がよかったって？」

「ま！ なんにも聞いてなかったの？」

「ごめん、ちょっと考えごとしてたから……なに？」

「もうっ、しょうのない弟^こ！ あのね、かりんちゃんが将来、浩一と結婚してく

……」

千鶴の言葉に驚いたかりんは、あわてて話に割って入った。

「ち、ちいちゃん！ わたし、べつに、そういう意味で言っただけじゃ……」

「あら、じゃあ、どういう意味で言っただの？」

「そ、それは……」

かりんが、返答に窮^{きやう}して思わず立ちどまったそのとき。かりんたちの後方から、若い女性の乗^のった自転車が一台、控^{ひか}えめなベルの音をたてて近づいてきた。狭^{せま}い裏通りを道幅^{みちはば}いっぱい、三人ならんで歩いていたらだろう、通行のじやまになつたのだ。

三人の中心にいたかりんは、さつと道をあけ、ベルを鳴らした人物にひとこと謝^{あやま}るうとして、ふり返つた。が、その人物はかりんが口^{くち}をひらくよりも先に、

「貴方^{あなた}たちだつたの……」

と言つて微笑^{ほほえ}み、荷台^{にだい}つきの白い自転車からぱつと飛び降りた。

かりんたち三人の前に現れたその女性は、洗いざらしの501^{ジーンズ}に黒のハイネツクといういでたちで、ウェーブのかかった髪を襟^{えり}あし付近でかく束^{たば}ね、からだの前に垂^たらしている。

身長は、かりんとほぼおなじくらいか。けつして童顔というわけではないのだが、ごくひかえめなメイクに、カジュアルな着^きこなしも手^て伝^{つた}つて、見かけ上は、二十歳^{はたち}前後の学生にしか見えない。だが、この女性こそ、浩一とかりんのクラス担任で、数学の教師、相原^{あいはら}美香^{みか}にちがいがなかった。

「おはようございます!」

きれいに三人そろつて——とは、いかなかったものの、元氣のいい朝の挨拶^{あいさつ}に、相原^{あいはら}は笑顔でうなずいた。

「おはよう……」

相原は、かりんたち三人の顔をさつと一瞥^{いちべつ}したあと、浩一に向かって何か言^なおうとし、口^{くち}をひらきかけた。が、そのとき。

「先生、ちようどいいところに來^きたわ!」

「え?」

「はい、これっ!」

そう言いながら、かりんは自転車のバスケットから黒い革靴^{レザーバッグ}を取りだし、その持ち主である相原に押^おしつけるようにして手渡すと、自分の鞆^{たば}をかわりにその中へと落としこんだ。

かりんの行動がまるで理解できない相原は、ただぼかんと口^{くち}をあけてながめている。

「相原先生、自転車……ちょっと借りるね」

自分の革靴かばんを胸に抱きしめ、左手だけで自転車を支さえていた相原から、かりんはなかば引つたくるようにしてハンドルを奪い取った。

「あ、あの……」

「ごめんね、先生。わたし、ちよつとした急用があるの。早く学校に行かなきゃならないから――。あとで、お礼れいにジュースカなにかおごります！」

「ちよ、ちよつと琴宮さん！」

かりんは自転車を勢いきおいよく押していき、充分な加速が得えられたところで、ぱつと飛び乗った。

が、少し走ってから、ふと思いだしたように急ブレーキをかけ、千鶴をふり返って、言った。

「あ、ちいちゃん。よかつたらうしろに乗っていかない？」

「え、いいの？」

「うん、ちいちゃんなら軽いし、ぜんぜんへいき」

「サンキュー、かりんちゃん！」

千鶴は小走りに駆かけていき、荷台にだいに横座よこすわりになった。

「先生、おさきに……」

その瞳ひとみに、いたずらっぽい光をたたえたまま、ぺこつと頭を下げる千鶴。

そうこうしているうちに、ふたりを乗せた自転車は、ふらつきながらも前進しはじめる。

呆気あっけにとられたまま、傍観ぼうかんを余儀なくされていた浩一の耳に、かりんのからかうような調子の声が響いてきた。

「浩ちゃん、先さきに行ってるねえっつ。あゝんまりのんびり歩いてると、遅刻しちゃうわよおっつ！」

荷台にだいの上からは、千鶴が浩一に向かってあっかんべをしている。浩一は、はっとなつてふたりを追い、走りだした。

「あ、おいつ、ちよつとまでよ！ かばんくらい持もってけって……」

「紺野くん！」

呼び止められ、思わず立ち止まった浩一は、ふと、妙な殺気を感じてふり返った。

と、その顔面に迫ってきたのは、相原が投げつけた革靴である。

「わっ!？」

浩一は、反射的にそれを受け止め、思わず口を尖らせた。

「あつぶねえなあ、なにすんだよ」

浩一が顔を向けると、子供のように頬を膨らませ、いかにも「ご機嫌ななめ」といった感じの相原が、腕組みをし、仁王立ちになっていた。

「学校までお願いね!」

相原は完全な命令口調でそう言うと、浩一の横をすり抜け、さっさと歩いていく。

「ちえっ。なあんでおれが先生のかばん持ちしなきゃなんないだよ。おれはまったく無関係だろ」

両脇に鞆を抱え、相原の後を追いつつながら浩一がぼやく。しかし、相原は、前を向いたまま言い放った。

「だって、後ろに乗っていった娘……あなたのお姉さんなんですよ?」

「……………」

浩一は、反論するだけ無駄だと思ったのか、ほうつと息を吐きだし、黙ってうなずいた。

「でも、どうせ二人乗りしていくんなら、美香のほうを乗せていつてくれても、よかったと思うけどな……」

ひとりごとのようにつぶやく相原に対し、浩一がぼつりと言った。

「先生が重いからじゃない?」

もっとも、体重に関することでこんなふうにはかにされ、だまっている女性はどこにいるだろう。数学の教師のくせに、妙に子供っぽく、おっとりしたところのある相原も、その点に関しては例外ではなかった。惘然とした表情で、浩一の前に立ちはだかり、紅唇をとがらせた。

「紺野くん、センセイの体重、知ってて言ってる? 自慢じゃないけど、これでも、えっと……、ジャスト四七キロ、なんだから!」

「ああ、やっぱりな……」

「なにがやっぱりなの?」

横目でじろつと浩一を睨みつける相原。

「千鶴にくらべれば、五キロは重いぜ!」

実際には、三キロほどさばを読んでいた相原にとって、この一言はかなり応えたようだ。

浩一としては、ただ単に事実をのべただけで、他意はなかったのだが、彼女はそうは取らなかった。浩一の両手が塞がっているのをいいことに、耳をつまんで引っぱり上げ、そこに口を寄せて囁いた。

「あなたのお姉さんと先生とじゃ、身長がちがうでしょ？ だから、それに比例するぶん体重に差があってもいいわけよね。こんな初歩的な数学も解らないなんて、美香、とっても悲しい……」

「わ、わかった。わかったから——手をはなせて！」

「そう、解ってくれたのね。よかった」

相原は、そう言ってニツコリ微笑み、ようやく浩一を解放した。

が、その一瞬後。

「……あ、そうそう、わすれないうちに言っておくけど、きょうの放課後、追試の件で話があるから、必ず職員室まで来てね！」

「……………」

これには、さすがの浩一も絶句するしかなかったようだ。

魂が抜けたような表情で立ちつくしている浩一の胸を、手の甲でかるく叩くと、相原は太股かつ足ばやに歩きはじめた。

浩一は、つかのま恨めしそうな表情で相原を見やっていたが、やがて、諦観のこもった深いため息をつき、とぼとぼと歩きはじめた。

相原は、少し行ったところで立ち止まり、浩一をふり返って言った。

「紺野くん、そんなにノロノロ歩いてたら遅刻しちゃうわ。急ぎましょ！」

戸越高校は、都心にあってはめずらしく、九万七〇〇〇平方メートルという広大な敷地を有している。

にもかかわらず、その敷地のほとんどが、鬱蒼と生い茂った広葉樹や、水鳥が訪れたりする大きな池でしめられていて、グラウンドと呼べるものが、どこにも見あたらない。

が、それもそのはずで、運動場などの体育施設は、おもに大深度地下を利用してつくられていたからだ。おそらく、地上の景観を大切にしかかったためと思われるが、贅沢な話ではある。

ふだんはそんな閑寂かんじやくとした佇まいたたずをみせる戸越高校も、今は始業まえ、さすがに静かとは言いがたい状況下にあつたが。

「ありがと、紺野くん」

「いいえ、どういたしまして！」

学校の正門近くまできて、ようやくかばん持ちの任にんを解とかれた浩一は、校舎を目指し、逃げるように走りだした。

「つたく、きょうは朝からついてないぜ！」

そう愚痴ぐちりつつ、浩一は正面玄関の幅の広い小階段を、いつきに駆け上がり、吹き抜けになつていいるホールへと入つていった。

戸越高校では、いまだに下足げそくから上履うわばきへと履はきかえることが義務づけられているので、いちおう“下駄箱”なるものがある。もっとも、校舎内の雰囲気にながせ、スチール製で、鍵かぎが掛けられるようなタイプの物だが。

「ん？」

浩一は、ユニットのいちばん上の段だんにある自分のロッカーを開き、ふと、その存在に気がついた。

「も、もしかして、これは……」

おもわず、口くちにだしてそうつぶやきながら、浩一が中から引っぱりだしてきたものは、淡いあわさくら色をしたかわい封筒だった。

残念ながら、表にも裏にも差出人の名前は記しるされていなかったが、それがなんであるのかということくらいは、いくら鈍い浩一でもすぐに見当がついた。

浩一は、頭を動かさず、目だけですばやく周囲の状況をうかがった。

と、そのとき。授業開始五分まえを告つげる予鈴が鳴りはじめた。そのうえ不運なことに、玄関のほうから、ばたばたと幾人いくにんかの足音が近づいてくる。あせつた浩一は、さくら色の封筒をあわててポケットのなかにつつこみ、うわばきに履はきかえるのも忘れて、校舎中央の大階段を駆け上がっていった。

始業まえにもかかわらず、閑散かんさんとしている職員室に、グレーのスーツを着た長身そうく痩や軀の男が入ってきた。

男は自分の席に着くと、すぐにラップトップコンピューターを立ち上げ、自分の宛あてのメールをチェックしはじめた。

それが、おそらくはその男の毎朝の日課なのだろう。何通かはろくに目も通さず廃棄処分にしたが、ふと、あるメールに目をとめ、何かを考え込むかのよう、しばらくのあいだ動きを止めた。

そして、十数秒後。眼鏡の奥の細い目をさらに細め、鋭利な刃物のように鋭い眼差しで、それを読みはじめた。

——明日は満月ですね。いつものように食事をなさるのでしょう？ 午後三時に、いつものその場所で待っています。

「……………」

男は、残ったメールをチェックすることもなく、PCの電源を落として職員室を出ていった。それとほとんどすれ違いに、相原が入室してきた。

相原は、つかつかと自分の席に向かって歩いてゆき、机の上に革鞆を投げだそうとして、まわりを見まわし、思いなおした。そして、一度深呼吸をしてから席に着き、はじめて机の上に載っていた自転車の鍵に気がついた。

「あ、琴宮さん、ちゃんと鍵かけておいてくれたんだ。よかった……」

浩一が、鼻歌まじりに教室に入っていたとき、一時間目の始業ベルはとつくに鳴り終わっていた。しかし、教壇に立つ教師の姿は見あたらず、教室内はざわざわとして、落ちつきがなかった。戸越高校では、月曜日の一時間目がホームルームに充てられていたので、いつものことではあったのだが。

浩一は黒板の前を横切り、窓際のいちばん後ろの席に向かって歩いていく。すでに席に着いていたかりんが、浩一の姿をみとめ、声をかけてきた。

「ずいぶん遅かったじゃない？」

「まあね」

浩一は鞆を机の上に置き、椅子を引きながら、隣の席のかりんに向かってそう答えた。

「とつてもご機嫌みたいだけど、なにかいいことでもあったの？」
片手で頬づえをつき、微笑しながらかりんがたずねる。

浩一はニツと白い歯を見せ、言った。

「まあね！」

「ふう〜ん」

かりんは、すうつと目をほそめ、そんな浩一の様子をながめていたが、ふとその足もとに目をやり、下足^{げそく}のままなのを確認すると、いきなりぷつと吹きだした。

「なんだよ、急に……」

「だって……浩ちゃん、靴！」

「え？」

かりんに指摘^{してき}され、浩一は自分の足もとを確かめて頭をかいた。

「ま、いつかあ、ばれなきや……」

浩一は苦笑^{にがわら}いしながらふりむいた。

が。

「かりん？」

かりんは、机の上に顔を伏^ふせ、声を押し殺して笑いこけている。

「なに笑ってんだ？」

返事はない。

浩一が呆^{あき}れ顔で見ていると、やがて肩のふるえが止まり、わずかに頭が動いた。そして、前髪のすきまから瞳^{ひとみ}かのぞき、目と目があった。

瞬間、かりんはどうにもこらえきれないといった感じで、ぱつと顔を伏^ふせると、ふたたび笑いだしてしまった。

浩一は、さすがにむっときて声を荒らげた。

「何がそんなにおかしい！」

しかし、かりんのくすくす笑いは相変^{あい}わらずで、いつこうに止^やむ気配^{けはい}がない。

「くそっ！」

人間、理^{わけ}由^ゆもわからずに笑われると、ふつう妙に腹が立ってくるものだ。浩一としては、当然おもしろくない。胸のポケットから例の手紙を取りだし、挑発^{てんぱつ}的な言葉を叩^{たた}きつけた。

「かりんはさつき、おれのことをまるで女にもてない、とか吐^ぬかしてくれたよなあ？　だが、これをよおーく見てみる！」

「……………」

ふいに笑うのをやめ、かりんは顔を上げた。

見ると、目の前に淡いさくら色の封筒がぶらさがっている。

「あらっ、これがどうかした？」

かりんは真顔でそうたずねながら、浩一が手にしていた封筒をさっと掠めとった。

「うっ……」

あわてて封筒を奪い返し、浩一はつぶやいた。

「まったく、油断も隙もありやしねえ……」

かりんは、しれっとした顔で、おなじ質問をくり返した。

「その手紙がどうかしたの？」

「ふんっ、まだわかんないのか？ これはな、恋文というものだ」

「へえ、そう？」

かりんの反応は実にそっけないものだった。それを見た浩一は、封筒から中身を取りだし、広げはじめた。

「拝啓、浩一様……」

浩一は、ゆっくりと、もったいつけるような調子で、手紙の文面を読み上げていく。

それが功を奏したのか、かりんは落ちつかなげに居住まいを正し、ちらっと、浩一をぬすみ見た。

「突然、このようなお手紙を差しあげますご無礼……」

浩一がそこまで読み上げたとき、激しい口調でかりんが噛みついてきた。

「そういうのって、ふっつ、ひとまえでは読まないものよ！」

「へっ、そんなのひとの勝手だろ！」

「あっそう。じゃあ、どうぞご自由に！」

まるで、機嫌が悪いときの子猫のような仕草で、ぷいっとそっぽを向くかりん。浩一の顔に、してやったりという表情が浮かんだ。

いまや形勢は、完全に逆転しつつあった。

「妬いてんだろ」

「ふんっ、だあーれが！」

つんと澄まし、目をつむっているかりんの眼前で、浩一は手紙をひらひらさせ、再度挑発を試みた。

が、反応なし。完璧に無視された浩一は、

「まっ、そのうち、かりんにも紹介してやるよ」

そう言いながら、一応その手紙を折りたたみ、かりんの出方を待った。

それまで、完全無視を決め込んでいたかりんだったが、浩一の言葉につられてか、ゆっくりと首をめぐらし――。

高慢な、五世紀は昔の英国貴族の娘さながらに、あごをくつと上げ、“太りすぎて、自らの足では歩くことさえままならなくなってしまうたネコ”でも見るよ
うな目つきで、言い放った。

「へえー、ほんとう？」

「ちっ、いちいち頭にくる奴だな！ なんなら、賭けてもいいんだぜ！」

「あら、そう？　じゃあ、その手紙の娘と一週間以内にあわせてくれる？　そして
たら――そうね、なにを賭けようかな……」

「一週間か、まっ、いいだろう。そうと決まれば……」

と言いつつ、浩一が胸の内ポケットから取り出したのは、カナダ政府発行のメ
イプリーフ金貨だった。

目をまるくしてかりんが訊く。

「金貨!?　浩ちゃん、いつもそんなもの持ち歩いているの？」

「わるいかよ」

「べつにわるいとは言わないけど……」

「ちっ、つべこべ言ってねえで、この賭け、受けるのかどうかはつきりしろ！」

「いいわよ。メイプリーフでも、クルーガーランドでも。と・に・か・く、こ
の賭けはわたしの勝ちよ！」

「へっ、言ってくれるぜ。忘れるなよー！」

「そっちこそ！」